高松教区
再生と一致
ともに歩もう希望のうちに

カトリック高松教区報

２０１３年１１月１７日（第１５８号）
発行所　カトリック高松司教区　広報委員会
〒760-0074　高松市桜町1-8-9
TEL 087-831-6659　FAX 087-833-1484
Email
教区：catholic-takamatsu@takamatsu.catholic.ne.jp
広報：tk-koho@mxi.netwave.or.jp
生涯養成： yousei@takamatsu.catholic.ne.jp
教区ホームページ http://www.takamatsu.catholic.ne.jp/

ともに歩もう希望のうちに

〈特別号〉

高松教区50周年盛大にお祝い

４県から５００人　喜びと感謝

「ともに歩もう　希望のうちに」をテーマに高松教区設立50周年記念の式典が11月4日（月）司教座聖堂で行われた。式には教皇大使ジョゼフ・チェノットゥ大司教も出席、四国4県から司祭、修道者、信徒ら約500人が参加、会場は感謝と喜びと祈りに包まれた。

開会式の後『感謝』の部では京都教区の田中健一名誉司教が高松教区の百年の歴史を感銘深く語った。『希望』の部では子供たちが『神様が一番』の歌を合唱、「エマオへの道」の劇には大きな拍手がわいた。『賛美』の部では神を讃える歌声が聖堂に満ち溢れた。

にこやかに信徒に語る諏訪司教

その後、前教区長の溝部脩司教から『歴史に学ばない人はことをなせない。この50年が何を訴えかけているのかを生かさねば』と語り、信徒を励ました。

派遣ミサは諏訪榮治郎司教の司式で行われた。「ひとつになろう」の大合唱で始まり、教皇大使のあいさつがあった。説教で諏訪司教は「再生と一致へ共に歩んで行きましょう」と信徒に呼びかけた。奉納では信徒たちの『こんな教会に：』の願いが書かれたたくさんの葉で満開になった4県の県樹が捧げられた。

拝領祈願後、青年達がめざす『喜びと和で満たされた未来の教会像』についてメッセージを発表。教皇大使に感謝の花束が贈られ閉幕した。会場となった桜町司教座聖堂は和やかな雰囲気に満たされていた。

◆諏訪榮治郎司教の話

大きな船が大きく舵を切り、これまでのとてつもない長い歴史の方向が変えられました。地球人口の約17％すなわち12億人のカトリック信者の意識変革が起こり始めたのです。ある人はこれを20世紀の奇跡と呼びました。

再生と一致へ意識変えよう

それは今も着実に進行しています。これがヨハネ23世教皇の呼びかけた第二バチカン公会議でありました。

私たちの高松教区はこの大河の流れの胎動を感じるなか、希望のうちに生まれたのです。教区として生まれるまでの歴史は田中健一司教様の話にもあるように、多くの困難の中、数え切れない方々の祈りと奉献に支えられた歩みであったのです。どのように表現したらいいのか感謝の言葉が見つかりません。

このⅡバチカン公会議を受け止め、その精神を日本の教会の基本方針とする指針が示され、それを具体化すべく第一回福音宣教推進全国会議（ナイス1）が開かれました。深掘敏司教様の献身的な呼びかけと養成プログラムがはじめられたのです。

しかしその後十余年にわたり教区は混乱と分裂の傷をおってしまいました。

教区の「再生と一致」を取り戻すため溝部司教様は司牧者として捧げ尽くされたことは記憶に新しいことです。「どんな教会になりたいのですか」の問いかけがこの数年響き渡っています。この問いかけは終わることはないのです。歴史の主人公が神であることを覚えるとき、聖霊は私たちにささやき続けるのです。教会は常に新しく応えていくのです。神の国への「旅する教会」なのです。

教皇大使を迎え教区設立50周年を感謝と希望と賛美の心でともに祝う中、私たちはこれから新しい教会の姿を見るでしょう。　養成を通してわたしたちの教会意識が変えられ、より豊かな信仰生活を見つけるでしょう。信仰による希望のうちにともに歩んで参りましょう。

「あなた方の中で良き業を始められた方が、完成へと導いてくださることを確信している」（フィリッピ書）からです。

チェノットゥ教皇大使を囲んで

青年たちの心の風景
◇未来の教会像◇

教会にやってくる人の全員に共通しているのは「イエス様が一番」という単純かつ正直な心です。この心から教会、つまり信徒が生まれてゆきます。最初に「祈り」と「愛」が誕生します。愛の力をもって祈ることができ、また祈りが愛を育みます。次に人々を迎え、共に過ごす「受け入れ」が整います。迎える人々に制限などなく、決して拒みもしません。

若者からのメッセージを伝える

「いつでも」という言葉も大切です。今でも苦しんで救いを求める人のために、どんな時でもドアが開いており、風が吹いている教会が必要です。それは信徒の心であり、教会そのものでもあります。「誰でも・いつでも・受け入れられる」教会には「平安」が生まれます。一人一人の信徒が協力し、分かち合い、許しあうことで「平安」がより確固たるものへとなってゆきます。そして「平安」が「喜び」と「和」をもたらします。それは共にひとつになってキリストの下で祈れる喜びです。最後に「祈り」と「愛」の力で人々を「受け入れる」ことができ「平安」が生まれ、「喜び」と「和」で満たされた教会は「イエス様が一番」に「戻る」のです。私たち青年はこの循環型のように新しく生まれ続ける教会を目指します。

番町教会　河合　幸

◆田中健一司教・講演要旨◆

高松教区が設立されたのは50年前の１９６３年９月だった。知牧区だった四国が司教区に昇格された。被選司教の田中英吉神父に、すぐローマに来るようにとの連絡があった。司教叙階式を10月20日にサンピエトロ大聖堂で行うとのことで、田中神父は急遽ローマへ飛んだ。盛大な叙階式だった。ちょうどパリにいた四国教区の下田武夫神父が日本からの唯一の出席者だった。

初代は田中英吉司教

帰国すると教区の全司祭が集まり司教座聖堂で着座式を行い初代の田中英吉司教が誕生した。大阪の田口芳五郎司教も同席した。最初の仕事は教区内の各教会を訪問。愛媛、高知、徳島、香川を巡り、信徒たちと親しく交流した。以後14年間、田中司教は１９７７年に病で倒れるまで聖務に専念し様々な活動をされた。１９８３年5月20日、父なる神の御手に迎えられた。

１９７７年９月、2代目の深堀敏司教が着任して教区を導かれた。よく働かれたが、新求道共同体との出会いがうまくいかず大変苦労された。２００４年の離任まで教区大会など数多く開催され信徒を励まされた。２００４年7月、3代目溝部脩司教が仙台から来られた。２０１１年3月に退任され、現在後任の諏訪榮治郎司教が働かれている。

先人の苦労忘れてはならない

以上が高松教区の50年だ。

しかし高松の今を知るために１９０４年からの四国知牧区時代に触れねばならない。１８９１年には日本に函館、東京、大阪、長崎の４つの司教区だけだった。四国地方は大阪司教区が世話をしていた。１９０４年、四国は広島、京都よりも早く知牧区として分離したのだった。

ドミニコ会に委ねる

四国知牧区はドミニコ会ロザリオ管区に委ねられた。初の知牧区長はホセ・アルバレス師だった。１９３１年、2代目をトマス・デ・ラ・ホス師が継がれた。ホス師は台湾に住んでおられ、毎年船で神戸まで渡って来られた。私は堅信を授けていただいたので師をよく覚えている。

１９３３年から１９４０年までモデスト・ペレス師が3代目を務められた。この頃から日本は軍国主義へ走り始め、知牧区長、教区長などすべて日本人に交代せよとの国の命令が出され、田口大阪司教が四国知牧区長を兼務することになった。そのため田中英吉神父は22年間教区長代理を務めた。

大阪の田口司教が兼務の頃、私は司教の秘書をしていた。ある日、『明日から四国巡回をする』と言われ、田口司教と一緒に四国へ来て2週間くらい毎日毎日四国の教会を巡って堅信を授けたことがあった。

戦争で困難な時代に

四国知牧区から高松司教区の時代を振り返ってみたが、その間太平洋戦争があり、B29により四国のほとんどの都市が爆撃された。教会はこの困難な時代を乗り越えるための大きな犠牲と努力が必要だった。

戦後、ブルゴス会の司祭が来日し香川県西部を受け持ち、オブレート会も高知、徳島を受け持ってくださった。百年前の知牧区時代は汽車も高速道もなく、宣教師たちは馬で四国山脈を越えねばならなかった。そんな先輩たちの努力と犠牲があったからこそ今があるのだ。感謝の念を忘れないようにしなければならない。

感謝　教区設立当初からこれまで50年の間の司牧の歴史と、関わってこられた司教、司祭たちの働きとを顧みながら元京都司教田中健一司教が話をされた。（１面に詳細を掲載）祭壇前に設置された大型スクリーンに映し出された懐かしい画面に、当時を知る信徒たちは感慨深く見入っていた。50年の歴史の中で高松教区は新求共同体「道」との残念な出会いがあったことについても言及された。しかしそれにもまして先達たちによる信仰の遺産を大事にと、先に向かう教区に信仰による成長を励まし、感謝のうちにひと時を過ごした（愛媛地区担当）

希望　50周年の集いのテーマである「希望」の表現として子ども達が聖書にあるエマオの場面を演じた。主イエスが十字架の上で亡くなったことに落胆した弟子たちは希望を失いかけ、散りぢりになるところだった。しかし復活された主と出会い、弟子たちは自らの歩みが確実なものであることを悟り、心に希望の火がともされた。高松教区のこれからの歩みも主イエスの復活の確かさの中で、聖霊の賜物に強められて、弱さの中にこそ力が発揮されるとの確信を持ち、「希望」という合い言葉を掲げて福音を宣教する共同体へと向かう決意を新たにした。（香川地区担当）

司会のBr.八木さんと河合幸さん

賛美　感謝を捧げる時にはおのずと賛美の歌が溢れ出すものだ。

「これから一緒に行こう」をキャッチフレーズに心の奥深くから湧き出るうめきのようにテゼの祈りが聖堂を包んだ。導入の朗読によって祈りへと誘われ、その都度「御手の中で」「Bless The Lord」「Magnificat」「彼に聞け」「兄弟のように」の唱和が、これからの高松教区の宣教の歩みを暗示させるように、高知地区の兄弟たちの先導に唱和しながらひと時、心の溢れともいえる祈りの時間が流れた。祈りのみの唱和もそのトーンの中で潜心もなる。しかしメロディーに乗せて共に祈ることは、より一層の輝きを伴なった賛美となることを共に味わう恵みが与えられた。この恵みによって、これからの各小教区での賛美の祈りが、より深い信仰への扉を開くきっかけとなることを願いたい。（高知地区担当）

感謝の祭儀　徳島地区は50周年記念式典の中のミサを担当し準備してきた。ミサは式典の中でも大切な位置を占めているので、50周年のお祝いにふさわしいミサになるよう、何度も集まり、試行錯誤を重ねながらのよき学びとなった。私たちの小教区とは規模も雰囲気も違う司教座聖堂で、多くの方々を迎えての特別なミサということで、1週間前にも高松に出向き、打ち合わせを繰り返しながら準備をしてきた。そして、この大事な日の大切な感謝の祭儀・ミサの準備をさせていただく役割にあずかれたことは、50周年の記念というだけでなく、大きなお恵みと喜びとなった。そのお恵みと喜びをミサを通して、参加者の皆さんと共有できたことを喜びたいと思う。（徳島地区）

香川地区信徒で埋まった桜町幼稚園ホール

記念アトラクションの後、心を一つに捧げた感謝の祭儀では主キリストが私たちの真ん中に立たれ、主の現存の神秘が醸し出された。司祭団、信徒の姿は感動的で生きた信仰の証であった。これからの教区の再生と一致へ向け、共なる歩みの中から希望のうちに福音宣教を続けるべく恵みを得た。

溝部司教の励ましの言葉

「歴史から学ばない者はことをなせない」といわれる。教区50年の歴史はこれからの私たちに何を語りかけているのだろう。お祝いだけで終わってはならない。「ない、ない」というのではなく、楽観主義でやるのがよい。そして教会を考えていく。それが「ことをなす」ことにつながるのです。

女性の会　東北物産販売で支援活動

女性の会は式典の前のフリースペースを担当した。展示、演奏、喫茶のほか、東北物産販売。ふくろうストラップ、エコたわし、被災松絵葉書、醤油、甘い酢、白出し、味噌、塩ワカメなど売上総額62475円を販売元に送金。これを機に、各小教区単位で共同購入し復興を支援して行きたい。

四国会館２階にフリースペース

この教区に関係する宣教会・修道会が新しい召命を願い、各会についてボードを用い会の理念、創設の目的，沿革、創立者について、また各会の使徒的な働きについて写真や地図、文章で紹介しました。その他、喫茶コーナーとミニコンサートタイムもあり、集いの前のひと時を楽しんだ。

２００９年から教区民上げて「教区の再生と一致」へ向けて祈り、活動を続けてきた。信徒一人ひとりへの「どんな教会になりたいのですか？」との度重なる問いかけに応えて、四国4県の県木の葉にこれからの各々の小教区としてあるべき姿を祈りのうちに表明し、これを感謝の祭儀の中で奉納された。

◆徳島県樹（ヤマモモ）◆

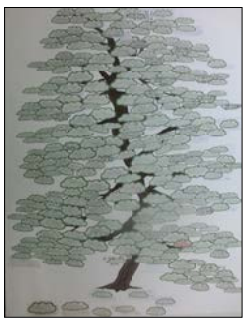
神さまから与えられた道を歩み、各自の力を生かすことが出来るようにしてください。いつもグッドニュースであふれる教会となりますように。信者と未洗者、高齢者と若者、全ての人が尊敬の念を抱き、愛し許しあえる神の民となれますように。日々の疲れを癒し、ホッと出来る教会、神を感じる教会、子どもたちの歓声が聞こえる教会、信徒一人ひとりが綴った大切な思いが、小さな地区を育てる糧となりますように。共に感謝し、祈っていきます

◆高知県樹（杉）◆

主よ、みなが仲良く助けあい、ゆるしあい、分かりあえる兄弟姉妹として、いつも笑顔で交わっていける教会、みんなが主に心を向け真の一致の実現へ向かう教会へ力を合わせます。私たちの希望を託した葉を、大きく実らせるこの杉の木がここに奉献され大きな祈りとなりますように。杉の木はその多くが建築材となります。私たちのすべての祈りを吸い上げたこの杉の木を使って一人ひとりが、神の愛に満ちた神の共同体を作り上げていく決意を主に捧げます。

◆香川県樹（オリーブ）◆

主よ、わたしたちの今日までの信仰をはぐくみ育て導いて下さった教区への感謝と共に高松教区の再生と一致を願って祈ります。私たちは内にこもり閉ざされた共同体ではなく、だれもが訪れやすい温かい教会、開かれた教会、共に祈り、共に語り合い、共に分かち合う教会になりたいと思います。また聖霊によって一人一人が活かされ、神の愛に希望をおき、神の国を表すキリスト中心の教会を目指して歩んでいきます。主の優しいまなざしをいつも意識できますように。

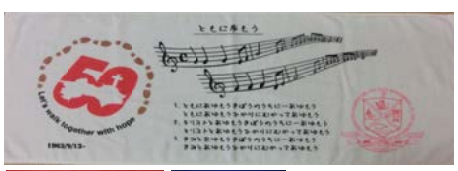


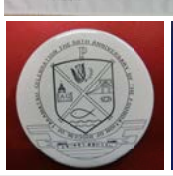
◆愛媛県樹（松）◆

主よ、歴代司教、司祭の計り知れない苦労の実りとして、大きな喜びの内に教区設立50周年を迎えました。この50年の歩みを振り返り、これからの教会の在るべき姿として、家族の喜びと愛に満ち一致した教会、若者が信仰の喜びを生きることが出来る教会、宣教への活力を真に実現できる教会、聖霊の息吹に満たされた信仰を持ち続ける教会、子どもたちにその愛を伝える教会、その他多くの願いを持つ信徒一人一人を励ましてください。

心の中心にキリストを迎え、話し合い、助け合い、分かち合い、励まし合って一致の内に歩み続ける教会になることが出来るように助けて下さい。

フリースペースコンサート風景





1963年11月1日発行のカトリック新聞

歓びをともにするフィリピーナ